

2009年の暮れも押し迫った12月28日（月）、「第1回まちづくりスタディーツアー」と題して、東京都立川市の大山自治会事務局にうかがいました。

大山自治会は、国営昭和記念公園のすぐ近く、都営上砂町1丁目アパート（通称・大山団地）の自治会組織。「人が人に優しいまちづくり」を目指して、さまざまなアイデアを実践し、加入率100%、奇跡の自治会として全国から注目されています。

会長の佐藤良子さんは、就任11年目のベテラン。住民からの信頼も厚い「まちのお母さん」。まち研の会員でもある佐藤さんが、実体験をもとに、まちづくりの秘訣を話してくださいました。

大山団地は、1220世帯、約3000人が暮らしている。そのうちの680人は65歳以上の高齢者、710人が児童以下の子ども。高齢者も多いが、若年層も多い。住民相互が目配せする必要のある世代に該当する住民が多いのが特長。自治会は、会長1名、副会長5名、会計2名、監査2名、区長26名、専門部長6名の計40名で構成。月1回開催の定例会での情報交換や、体育部、文化部、交通安全対策部などの各専門部を組織し活動している。

住民の家族構成から、車両、動物の飼育状況、緊急時連絡先の登録を義務付けていて、全ての住民が受け入れている。「むしろ、緊急時の対応などを迅速に行うことの重要性を理解していて、個人情報保護の理由で拒否される住民はいません」と佐藤さん。

もともと、市役所に遠い地域だったことから、住民の利便性の向上と、安心・安全なまちづくりを念頭において発足した経緯があり、住民サービスに徹底していて、事務所を置き、選任の職員を採用し、活動内容や活動場所が「目に見える」自治組織としての体制を整備してきた。佐藤会長は専用の携帯電話を所持し、24時間対応で、住民からの困りごと相談に応じている。防犯、環境美化から、家賃支払い、年金問題などごく個人的な悩みまで、寄せられたあらゆる意見や、相談にも丁寧に応えることが、自身のモットー。

自治体制を機能させるために、「住民1人の役割」を意識してもらうように活動している。と言っても、大げさなことではない。自分が両隣に目配せすることで、自分も見守られている安心感を得られる「昔ながらの長屋の発想」を徹底して、相互扶助の考え方を浸透させてきた。いつかは自分も助けられるときが来るけれど、自分が元気なときには、近所の人を助けていくことを自治会と会員が実践している。その成果のひとつが、孤独死ゼロの実現。大山では、独居住人が部屋で亡くなっていたとしても、何日も放置されることはない。住民同士、ライフライン各社と連携し、一人ひとりを見守るシステムを確立したからだ。

最近の取り組みは、ボランティア人材バンクの設置と活用。「自治会の夏祭りでおみこしを担ぎたい」という子どもたちからのリクエストに、大人たちが立ち上がり、元大工、板金業OBの方などが自身の得意分野のスキルを活かし、大山オリジナルのみこしを完成させた。もちろん、子どもたちからは大好評。まつりは例年以上に熱気を帯びた。この経験から、地域に住む「その道のエキスパート」の力を自治会に反映してもらうためのボラン

ティア人材バンクのアイデアが生まれた。「人材、スキルも地域の宝。眠らせてしまうのはもったいない」。はじまったばかりの取り組みだが、賛同者は多い。

人を育てる、あるいはすでにそこに住む人材を活用する。自治会は人と人をつなぐ組織だからこそ、大山自治会の活動は人を大切にしている。

自治会事務局での佐藤さんのお話と団地内散策、スタディーツアーは、予定時間をオーバーして終了しました。ツアー参加者は、大山自治会のあらゆる取り組みをご自身の活動に重ね合わせ、質問や議論を交わされました。「現地に来る大切さを実感した」「近い距離で意見交換をできてよかった」などの感想をいただきました。